

これらは窯跡に非常に接近した古墳であったが、最近の調査によってやや遠い古墳にまで供給が及んでいることが知られた。窯跡群から西へ5～6kmほど距てた八女群広川町に所在する鈴ヶ山古墳群・山の前古墳群⁵⁾がそれで、報文によって知る限りでは鈴ヶ山1号墳・同2号墳・山の前2号墳などの出土資料中に、中尾谷窯群・塚ノ谷第4号窯資料ときわめて類似したものがあり、報告者も指摘している。これらは器形の特徴ならびにヘラ記号から導き出されたものであってほぼ誤りのないところであろう。第V期の資料については現在までに八女古墳群の中に符合すべき資料を見出すことはできない。

これまで窯跡出土資料に対比できる須恵器をもつ古墳をいくつかみてきたが、須恵器が限られた地域のみで生産される特殊な製品でないことから、現在の段階では製品の広がりについて問題とすることはできるが、例えば1古墳が寄せ集めの状態で須恵器をもっている場合に、1つの窯の製品と被葬者の関係を問題にすることはきわめて困難である。6世紀中ごろの時期になると埋葬時の祭器としての需要から一般の生活へ須恵器が浸透してゆくことが考えられ、このことから副葬品にみる寄せ集めの状態も説明されよう。したがって、古墳へは2次的に集められた形になる場合もあることは十分考慮されるべきである。現段階では製品の広がり一点一点をおさえてゆく作業を根気よく続けねばならない。

(真野 和夫)

註1) 水野清一・樋口隆康・岡崎敬「対馬」1953

2) 調査報告Ⅱ・Ⅳ

3) 小田富士雄・柳田康雄・真野和夫「上大利野添大浦窯跡」福岡県教育委員会 1970

4) 小田富士雄・真野和夫「小迫窯跡」北九州市教育委員会 1972

5) 西谷 正ほか「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ」福岡県教育委員会 1972

Ⅲ 埴輪生産の諸問題

八女古窯跡群の継続調査中に立山山窯跡の発見があり、これが埴輪生産窯跡であったことは調査団を驚ろかせたし、また関係方面の人々の関心を高めたのであった。九州地方における埴輪窯跡の発掘調査は、これがはじめてのことであったが、また埴輪窯跡の発見自体が西日本では稀有のことに属していて、その意味からも世間の興味をひくに十分であった。九州地方の埴輪研究の将来に与える影響も少なくないと考えられるので、この機会に八女地方における埴輪生産をめぐる二、三の問題をとりあげて、今後の研究に資することにしたい。

埴輪窯跡の研究概要

古墳の墳丘に象形及び円筒埴輪をめぐらすものは少なくないし、また古墳時代の研究上に占める埴輪研究の位置は重要なものがある。すでに埴輪に関する研究は多く出されているが、その生産遺跡に関する研立となるときわめて少ない現状である。これまで報告されている埴輪の製作工房、窯跡に関するものは東日本の実例がほとんどである。東日本の埴輪生産遺跡の調査は明治39年、柴田常恵氏の群馬県藤岡市本郷における埴輪製作竪穴の発見にはじまる¹⁾。柴田氏は「和名鈔」にみえる土師郷の

本郷にあたるところから、この地に拠った土師氏の一族が製作に従事したであろうと指摘されている。森本六爾氏は昭和2年に東京都大田区下沼部^{しもぬまべ}において、埴輪製作工房とみられる竪穴の発掘調査を行なって注目をあつめた²⁾。さらに後藤守一氏も昭和8年、埼玉県鴻巣市馬室^{まむろ}で埴輪を生産した登り窯2基の発掘調査を行なったが³⁾、それは須恵器窯跡と同じ構造のものであった。第二次大戦後になって埴輪生産遺跡の発掘調査もいくつか実施されてきた。昭和27年、尾崎喜左雄氏は群馬県藤岡市本郷の埴輪窯跡の調査を行なった⁴⁾。また昭和38年には、大川清氏が栃木県佐野市で埴輪窯跡の調査を行なっている⁵⁾。昭和40～43年には大塚初重、小林三郎氏らが茨城県勝田市馬渡で埴輪の製作工房、窯跡の調査を行なっている⁶⁾。

東日本にくらべて西日本では埴輪生産関係遺跡の発見自体がきわめて少ない。昭和9年、藤沢一夫、小林行雄氏は大阪府豊中市青池の埴輪窯跡を紹介し、これが須恵器窯跡と同じ構造であること、須恵質埴輪と須恵器が発見されたことを報じている⁷⁾。昭和12年には山口県萩市大井・馬場発見の埴輪窯跡について報告された⁸⁾。これは焚口と煙出し部を欠失しているが残存全長5.2m余、焼成部最大巾1.3m、天井までの高さ70cmの花崗岩質の土層につくられたトンネル式登り窯であった。九州地方では嘉穂郡幸袋町目尾で工事中に埴輪窯跡が発見されたが未調査のままに湮滅し、形象埴輪(馬頭)一個が児島隆人氏のもとに保管されている⁹⁾。埴輪生産遺跡はこのほかに確かなものを見聞したことがない。したがって八女市における埴輪窯跡の発見はこの方面の研究者の耳目をそばだてるに十分であった。

これまでの埴輪生産に関する遺跡の調査は東日本地域にかたよっており、西日本地域ではきわめて少なく、九州地方では今回の八女市における調査がはじめてである。したがって埴輪生産に関する全般的な予察、論考もかなり制約されているが、金谷克巳¹⁰⁾、坂詰秀一¹¹⁾氏らによって整理が試みられていて参考になるところ多い。

(小田富士雄)

埴輪窯の構造

立山山埴輪窯跡は構造上これまで調査の行なわれた須恵器、あるいは瓦を生産した他の古窯跡と大きく異なるところはなく、地下式登窯と汎称されるものである。規模・構造に関する比較表はすでに前項において掲げられているのでここでは省略したい。

まず立山山窯群の立地の問題をとりあげると、丘陵斜面を利用した点は他の古窯跡と共通し地下式登窯構築に適した場所を選択している。しかしながら、現在までに知られているこの地域の古窯跡の分布をみると、須恵器あるいは瓦を生産した古窯跡が比較的丘陵の奥部に位置しているのに対し、孤立的に平野部に近い所に築かれているのは注目される。これは須恵器の場合がより高温を必要とするために、風向を考慮して丘陵がおしつまった袋部のような地形を選択することと、頻繁な操業回数にみあう、薪炭の供給が容易な場所であることが必須の条件であるためとみられる。これに対し埴輪の場合須恵器とは比較にならないくらい大形品であるから、長距離の運搬は到底困難である。また焼成温度も須恵器の場合程は要求されないから、高所の風の強い場所を選ぶこともなかったであろう。したがって、まず何よりも使用される古墳との距離を考慮した運搬に便利な場所が選択されたに違いない。

次に構造を平面形の上からみれば、ほぼ操業を同じうすると思われる第Ⅲ様式須恵器を生産した中尾谷窯群、塚ノ谷第4号窯に比べ長さの違いがまず上げられる。とくに長大であった塚ノ谷第4号窯は除くとしても、約3m以上須恵器の窯の方が長い。立山山埴輪窯群の所在地は中尾谷窯群とは直線距離にして約800mくらいで古くからの道によって結ばれているか、両窯群の生産集団にかりに違いがあったとしても、埴輪窯が同じ登窯構造をとる以上なんらかの交渉は行なわれていたに違いない。立山山第1号窯および2号窯がどちらも約7m程の長さに構築されていたことは埴輪生産量と密接な関連をもつものではなかろうか。いま第1号窯跡によって1回の操業で焼成される円筒埴輪の数量を試算してみると、巾1.4m・長さ4mが焼成可能の床面積とすれば、直径40cmの大形品ばかりを並べたとして最大30本、23cm前後の小形のものばかりの場合約100本という数が機械的には考えられる。もちろんこれは両者が混在して焼成されることもあろうし、形象埴輪類といっしょになることもあろう。また口縁部の開き工合によっては、くっつけて置けない場合あるいは失敗もあろう。一応の目安を示した数字にすぎないことをお断わりしておかねばならない。1回の窯詰めの方の数量が出たところで、これらが樹立される古墳の方に目を転じてみると、こちらの地方で埴輪の総量が知られる古墳の調査例がない現状では今のところ何とも言えないが、八女丘陵では埴輪円筒の使用が最も多いのは筑紫国造磐井の墳墓として知れる岩戸山古墳であろう。そして他の古墳ではこれに比べ急激に減少しているとみられるから1墳に数百本を要するということはまず考えられない。したがって立山山埴輪窯が仮に1基の古墳に要する埴輪生産を目的として作られたならば、その古墳が岩戸山古墳級のものでない限りそれほど大きな生産量を必要としなかったかも知れない。

最後に縦断面形では、須恵器窯に比べるときわめて床面勾配が緩やかにつくられている。須恵器の窯では現在までこの地域で20度以下の床面傾斜のものはみつかっていない。ところが立山山窯群では、第1号窯が初期の床面で16度その後床上げすることによってほとんど水平に近づいている。また、第2号窯は13~25度をはかりやや傾斜が強いようである。これは第2号窯→第1号窯という構築の前後関係でもわかるように、第2号窯がより須恵器の窯構造に近いことを床面勾配においても示していると考えられる。つまり二つの窯を通しての最終操業時には、床面が水平に近くでも焼成には十分であることを経験から学んだのでないだろうか。大形の埴輪円筒の窯詰めには床面が水平に近ければ、それだけ容易となることは言うまでもないことである。他地域の埴輪窯の調査例では、栃木県唐沢山窯跡群¹²⁾の場合13~30度の傾斜のものまでさまざまあり、概して勾配の大きな窯が多いようである。また茨城県馬渡窯跡群¹³⁾では20~24度と報告されている。これらに比べると立山山窯跡の場合床面傾斜がきわめて小さくなることは興味ある傾向である。

さて、立山山窯跡群の第1号・2号の構造では第2号窯がより須恵器の窯との類似点が見出されることは先に述べたが、両窯とも床上げを行なっていることは共通している。そして第1号窯では、1回目の床上げにともなって焼成部奥に近いあたりに二段の階段状構造をもっている。また、入れ子状に埴輪円筒片を壁際に並べた状態は、すでに述べたように1回目の床上げの段階で不都合が生じた窯構造を改変しようとした現われとみるべきで、床面勾配が緩やかになっていることと何か関連があるかも知れない。単に壁面の補強を目的としたものならば壁際に何枚も重ねて置く方がより効果的であつたろう。

以上、立山山埴輪窯の構造を、これまで調査してきた八女古窯跡群の窯構造との対比を中心にして述べてきたが、2基の調査例では資料がかたより誤まった見方をしないとも限らない。今後、西日本各地で埴輪窯跡の調査例がふえることを期待するものである。
(真野 和 夫)

形象埴輪の問題

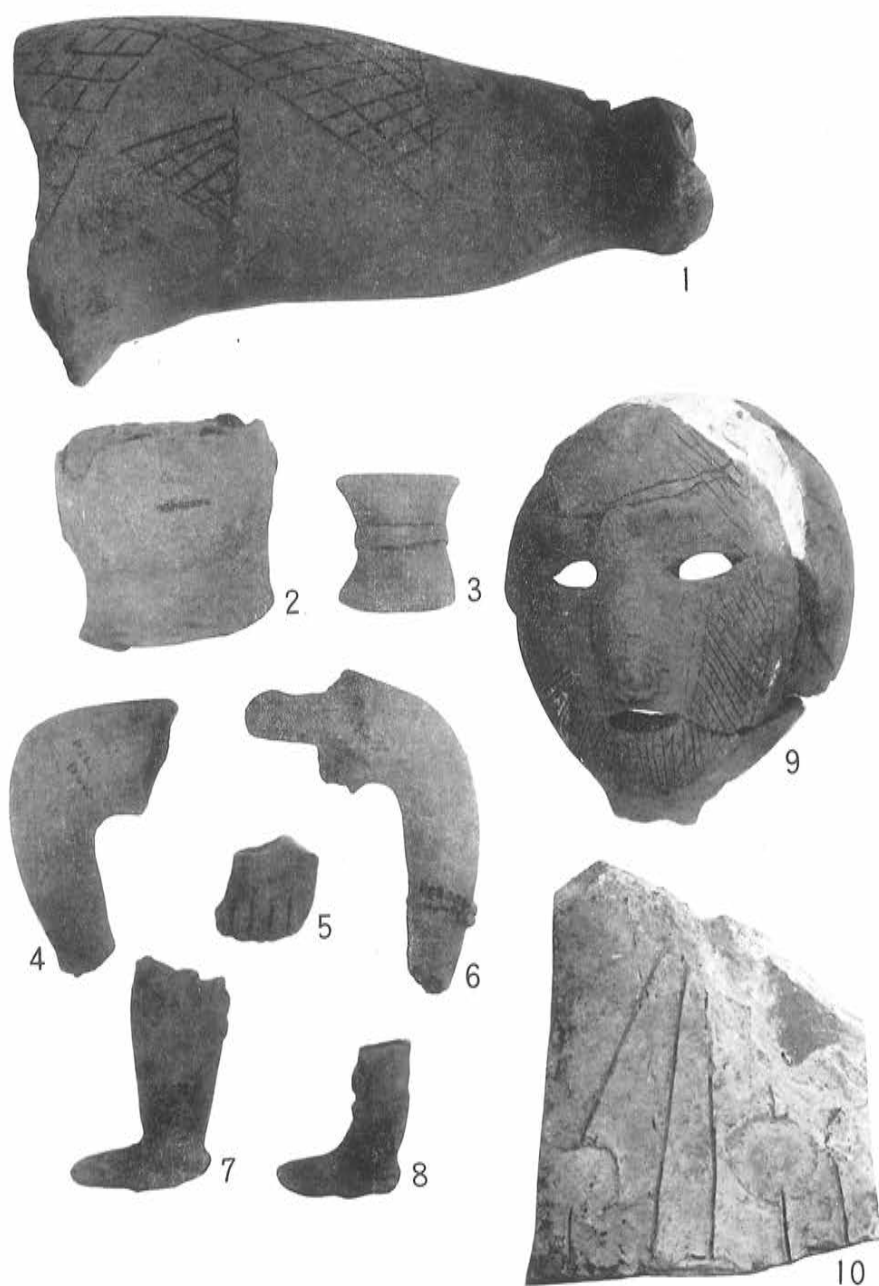
立山山埴輪窯跡群では、採集された資料は多くはないが、円筒埴輪の他に人物・家などの形象埴輪および土師の竈を製作したことが知られた。円筒埴輪では形態・成形手法によって他と区別できるほどの顕著な違いを見出すことは困難であり、第1号窯跡出土の円筒口縁部に刻まれたようなへう記号をもつ資料が境せば古墳との対比も可能になってくるとみられる。そこで形象埴輪を頼りにして八女古墳群との需給関係についての手掛りを得ねばならない。

八女丘陵の古墳群中、形象埴輪を出土した古墳については、かつて発表されたことがあった¹⁴⁾が、ここではその後の資料をも含めて改めて一覧表にして掲載することとする。表によると人物に関する形象埴輪資料は、石人山古墳・岩戸山古墳はじめ9基の古墳から発見されており、家形埴輪は同じく石人山古墳はじめ5基の古墳からの出土が知られている。そして立山山窯跡群の操業年代を、出土した土師壺より鬼高期並行とみるならば、六世紀中葉の年代が与えられるわけであるから古墳もさらに限

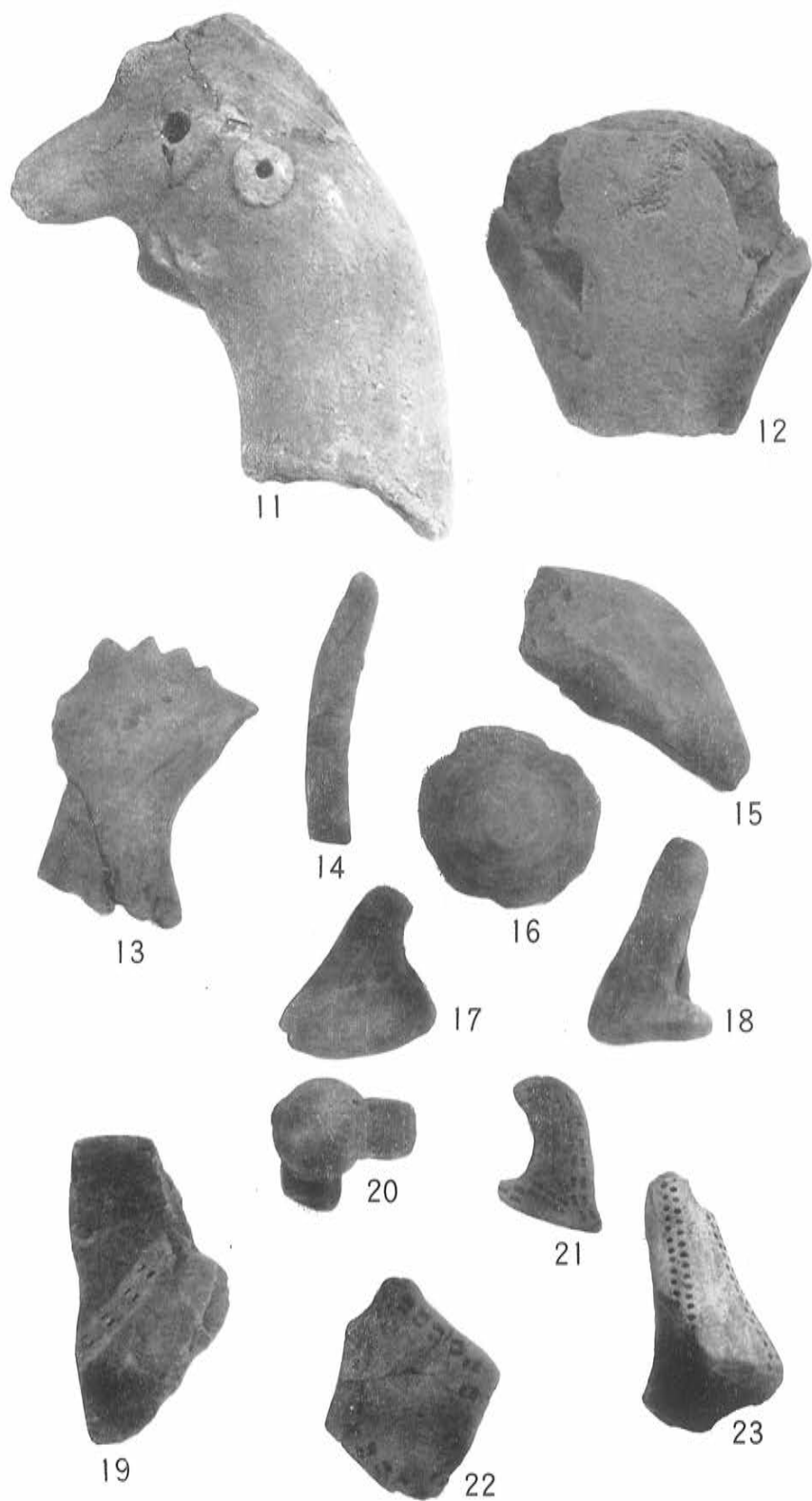
八女地方における埴輪発見古墳一覧

古 墳 名	所 在 地	外 形	内 部 構 造	形 象 埴 輪	円筒埴輪
石人山古墳	八女郡広川町一条	前方後円	石室 横口家形石棺	人・馬・犬・家・ 短甲	
神奈無田古墳	八女郡広川町太田	前方後円	?		○
	八女郡広川町藤田	?		人・馬?	
城山古墳群	八女郡立花町山崎・城山	円	?		○
	八女郡立花町北山水天宮	?	?	人	
欠 塚	筑後市欠塚	円	?		○
岩戸山古墳	八女市吉田	前方後円	?	人(男女)・飾馬・ 猪・鶏・家・琴	○
	八女市豊福	?		人	
大神宮古墳	八女市豊福	円		鶏	○
釘崎3号墳	八女市豊福	前方後円	横穴式石室		○
乗場古墳	八女市長峰	前方後円	横穴式石室 装飾あり	人(冠帽)・家・刀?	○
善蔵塚古墳	八女市託間田	前方後円	?	人(肩甲着装)	○
一念寺古墳	八女市一念寺	円		人(足)	
真浄寺2号墳	八女市本	円		家?	
立山1号墳	八女市立山	円	横穴式石室	人(腕)・家・甲・ 馬	
団蔵塚	八女市立山	円	?		○
丸山古墳	八女市立山	前方後円	?		○
川犬古墳	八女市川丈	円	竪穴式石室		○

第44圖 八女古墳群出土形象埴輪(一)



第45圖 八女古墳群出土形象埴輪(一)



定される。また地理的条件を考慮して近くの古墳にしぼるならば、乗場古墳・善蔵塚古墳・一念寺古墳・真浄寺2号墳・立山1号墳などがあげられよう。資料の少ない現時点でこれ以上の類推はかえって危険である。今後の資料の追加を待ちたい。

(真野 和夫)

埴輪の生産

八女地方さらには西日本地域における埴輪生産の過程、組織、需給関係などを究明することは埴輪生産の問題を追う上で最後にたどりつくところであるが、立山山窯跡群が九州地方における埴輪窯跡調査の初見である現在ではなんとしても時期尚早といわざるをえない。立山山窯跡群の場合だけをとりあげてみても製作工房跡は未発見であり、また製品供給古墳についても、未だ十分に確定していない。時期的には八女古墳群の第Ⅲ様式須恵器相当期に比定されるであろうことは、ほぼ確かであろうが、60基をこえようとする八女古墳群の古墳個々についての調査は未だ行なわれておらず、今日内部構造や出土品、埴輪などが知られている古墳にしても、そのほとんどが盗掘や破壊に伴って知られたものであるから、特に形象埴輪などにいたっては識者の目にふれることなく、散逸したものもあるであろうし、また未発見のままに埋没しているものもあることと思われる。したがって現在知られている形象埴輪の出土例だけで結論をいそぐわけにはゆかない。しかしながら八女地方において、将来に埴輪生産の問題をすすめてゆく最も近道は、やはり八女古墳群の古墳個々の記録を作成し、出土埴輪を比較検討する作業をすすめてゆくことであろう。また製作工房跡についてもいつの日にか発見されるであろうことを期待するほかはあるまい。

これまで製作過程についての報告例を徴するならば、東京都下沼部の例では長方形竪穴の中央に埴輪円筒にして6～7個分の粘土塊があり、これをめぐって焼成不十分な7～8個分の円筒の未製品が発見された。それで、家族的少人数の製作であって一回に7～8個を製作したであろうと推定されている⁽²⁾。また最近調査された茨城県馬渡における製作工房跡と窯跡の立地関係なども参考するとき、窯跡からさして遠からぬ低台地で小竪穴を構えて製作されていたであろうことが推測できるのである。埴輪の製作工程に三段階を設定したのは金谷克己氏である。すなわち①彫塑、②乾燥、③焼成の三工程を考えている⁽¹⁰⁾。さらに窯の形態については今日あまりのこっていないところからみて、ごく簡単なものであったろうと推定しており、平地につくられた平窯か、天井のない窖窯であろうと述べている。また須恵器を製作するようになって導入された登り窯が埴輪窯にも採用されるようになり、群馬県本郷、埼玉県馬室、大阪府青池、山口県馬場などの登り窯が出現したと考えられる。立山山窯跡群はこのような段階の埴輪窯であったのである。

土師器や埴輪の生産に従事した工人達は、一般に須恵器製作工人達とは系譜を異にするものであったと認識されている。土師器や埴輪生産者の集団は土師部を構成し、土師連を伴造として管掌されていた。土師部が陵墓、古墳の营造活動に参加したことは、有名な垂仁紀32年条の埴輪起源伝承にもうかがわれるが、土師氏一族は中央では皇室の陵墓や葬儀に関する職掌を世襲することとなった。「和名抄」に記載された土師部の痕跡を伝える土師郷の郷名をさぐれば、九州地方では筑前・穂波郡土師郷と筑後・山本郡土師郷があげられる。八女地方において土師部が存在した確証は得ることはできない。しかしながら立山山窯跡で生産された埴輪が筑紫国造家一族の奥津城である八女古墳群に供給さ

れたであろう事実を考えると、この地方の族長層の墳墓という限られた階層の葬儀に関与していたということは、やはり埴輪生産という特殊な活動に参加する農民集団が存在し、筑紫国造一族の支配下におかれていて、その需要を支えていたことは否定できないであろう。ただしそれが土師連に管掌される土師部として組織されていたように、八女地方で筑紫国造一族の配下において部民的統率が行なわれていたものであるのか、あるいは部民的統制を行なわなくとも、部の外周に位置づけられるようななんらかの政治的統制を加えられていたとみられるのかを決定すべき確証は現在のところ得られない。将来発見を加えるであろう生産遺跡の増加をまって解決をはかりたいものである。この問題について浅香山木氏は最近、土師器の生産者は倭政権から手工業部としても組織されず、「地方の族長層からも手工業生産者としての特別の政治的規制も受けず、農業共同体からの分離の傾向が殆ど見出されないのを一般的な形態とする」が、「限られた一部の集団のみが、特殊な需要のために手工業部として組織され、王権のもとに直結されているもの」があることを述べられていて¹⁵⁾、埴輪生産が土師器生産と異なり特殊な手工業生産であるとの見解を示しているのは注目される。また、埴輪窯が本来、平窯あるいは天井のない窖窯であったという金谷氏の見解に従うならば、立山山窯跡のように須恵器系統の登り窯を採用した時点から一層特殊な手工業部民的性格を明確化して、地方族長層との隷属関係を強めたと見られぬでもない。窯業技術の問題ともあわせて検討すべき問題であろう。

(小田富士雄)

註1) 柴田常恵「埴輪の製造地」東京人類学会雑誌第21巻246号・明治39年

2) 森本六爾「埴輪の製作所址及窯址」考古学1巻4号・昭和5年

3) 後藤守一「埴輪窯址の発掘調査」ドルメン3巻4号・昭和9年

4) 尾崎喜左雄「古墳のはなし」昭和27年

5) 大川清「安蘇山麓古代窯業遺跡」昭和39年

6) 大塚初重・小林三郎・川崎純徳「勝田市馬渡埴輪製作址」昭和47年

7) 藤沢一夫・小林行雄「埴輪と祝部の窯址」考古学5巻10号・昭和9年

8) 山本 博「長門国大井村発見の埴輪窯について」考古学雑誌27巻8号・昭和12年

9) 小田富士雄「九州地方古代窯址(須恵器・瓦)地名表(第一稿)」九州考古学29・30昭和41年

10) 金谷克己「はには誕生」昭和37年

11) 坂詰秀一「埴輪窯跡序説」立正史学28号・昭和39年

同 「東国埴輪窯跡研究の問題点—その学史的展望—」歴史教育12巻11号・昭和39年

以上、同氏著「歴史考古学研究第一」(昭和44年)収録

12) 大川 清「安蘇山麓古代窯業遺跡」窯業史研究所・昭和39年

13) 大塚初重・小林三郎・川崎純徳「勝田市馬渡埴輪製作址」昭和47年

14) 小田富士雄「古墳文化の地域的特色・九州」日本の考古学IV・昭和41年

15) 浅香山木「日本古代手工業史の研究」35ページ・昭和46年

〔第44・45図説明〕

1・人(腕)立山1号墳, 2~9・人岩戸山古墳, 10・零岩戸山古墳, 11・鶏大神宮古墳, 12・猪岩戸山古墳, 13・鶏岩戸山古墳, 14~23・馬具岩戸山古墳

(1岩崎光氏蔵, 2~8・13~18九州大学蔵, 9・12・19~23福岡教育大学蔵, 10・11八女市中央公民館蔵)